

ループできるゲームなんてヌルすぎる

泥人形

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いやマジでヌルゲー。

目次

ヌルゲ ー … 3	ヌルゲ ー … 2	ヌルゲ ー … 1
28	15	1

ヌルゲー：i

—— Loading

ジジジと何か焦がすような電子音が鼓膜を揺らして、僕は意識を取り戻す。

瞼を押し開ければ未だブレの残る世界が視界いっぱい広がって、少しの時間とともに輪郭をはつきりとさせていく。

鬱蒼と広がる森林、短く雑多に生える地面の雑草、そして、眼前で蠢く多数のモンスター。

深い黒にも似た赤色のカーソルが、踊るように視界の中で揺れていた。

——は？

いや待て待て意味が分からないぞ!?

どうしてこんなことに——!?

思わず跳ねるように飛び退けばその瞬間、鞭で打たれたかのような衝撃が背中を抜けた。

痛みは無い、が不快感が駆け抜ける。

勢いを殺され軽くよろめきながら振り向けば、そこにはやはり前方にもいた植物型のモンスター《リトルネペント》がおよそ植物には似つかわしくない、人のような大きな口の端から半透明の唾液を零していた。

そこまで見て、ようやく思い出す。

僕が立っているここが、仮想世界大規模多人数オンラインゲーム：ソードアート・オンライン——SAOの中であることを。

世界的にも注目され、本日をもって発売されたこのゲームが、クリアするまでログアウトが不可能になったことを。

その上ゲーム内で一度でも死ねば、現実世界でも死んでしまうことを。

それを聞かされて、思わず町の外へと飛び出してしまったことを。形振り構わずただ己のために先へ先へと進もうとしたことを。

そして、そして——眼の前にいるこいつらに、殺されたことを。ぞわりと寒気が背中を走る、ざわりと鳥肌が立って、自然と右手に持っていた片手剣《スモールソード》をギュツと握った。

何故僕は生きている？ 死んだはずでは？ もしかして茅場晶彦の放った言葉は嘘だった？ 死んでも実際に死ぬことはない？ いや、だとしてもこんな生き返り方あるか？ これではとんだクソゲーではないか？

吐き気のするくらい駆け巡る考えの中、ふと、システムウインドウを開いて自分の名前を見る。

いや、正確に言えば自分の名前の、その横にあるレベルの値。

『Lv. 1』

それが表示されていた僕のレベルで、それ自体は特別おかしなものではなかった。

ただ、ある一点を除いて、ではあるが。

本来、そこに表示されていて然るべき数字は2であるはずなのだ。僕は覚えている。

この狩場に来てどれくらい戦ったはわからないがそれでも、僕は確かに一度レベルアップをして、上がった際のファンファーレすら聞いたのだ。

良く見てみれば、握ったスモールソードも傷は殆ど無く、新品同然でそこにある。

レベルアップするまで使ったのであれば、剣の耐久値だってそれなりに減っているはずで、それは見た目にも反映されていて然るべきなのに。

おかしい、あまりにもおかしい。

これでは、まるで、時間が巻き戻されているようじゃないか？

突然、激しい不快感の連続で思考の海から引き上げられる。

HPバーはすっかり半分まで削られていた。

——しまった、やらかした。

素直にそう思う。

するべきことの優先順位をつけ間違えた。

目覚めた瞬間から僕は取り敢えずこいつらの囲いから脱出すべきだったのだ。

じわりと嫌な汗が流れるのを感じながらそれでも走り出す。

結局明かせなかった疑問をそのままに、薄く光らせた剣を走らせた。

リトルネペントは自走型の捕食系植物型エネミーで、足元から約50cm上の細くなっている茎の部分が弱点となっている。

そこをつけばレベル1でもソードスキルさえ使えば一撃で撃破が可能だ、レベル差を考慮しても、冷静に対処していけばこのエネミー自体はさして強力な敵では無い。

——こちらが万全の状態で、不意をつかれることもなく、また多数に囲まれていなければ、ではあるが。

つまりその全てを満たしていて尚且つHPを既に半分以上削られている僕はもうオシマイ、ということである。

それが分かっているにもかかわらず僕という人間だったが、数匹撃破したところで僕のHPは赤色にまで食い込んでいた。

後二、三発貫えば終わりだ。

こんな時、ライトノベルやアニメだったら、主人公が助けてくれるのにな。

なんて、現実逃避な思考をしたまま、僕の身体はさながら硝子の如く、砕け散った。

瞳に張り付くように、GAME OVERの文字が踊り、続いて

YOU DIEと表示されて、砕けたはずの僕の視界は真っ赤に染まって。

狂いそうになるくらいの警告音のようなサイレンに頭を揺さぶられながら意識をドロリと溶かした。

——Loading

ジジジと何かを焦がすような電子音が鼓膜を揺らして、僕は意識を取り戻す。

瞼を押し開ければ未だブレの残る世界が視界いっぱいに広がって、少しの時間とともに輪郭をはつきりとさせていく。

鬱蒼と広がる森林、短く雑多に生える地面の雑草、そして、眼前で蠢く多数のモンスター。

深い黒にも似た赤色のカーソルが、踊るように視界の中で揺れていた。

——はは。

乾いた笑い声が喉の奥から漏れて、そして僕は素早くスモールソードを振り抜いた。

眼の前にいたリトルネペントを切り裂き砕き、それを踏み抜くように僕は駆け始めた。

先ほどみたいに動揺することはなかった。

半ばこうなることを予想——いや、期待していたから。

真横から水平に放たれるソードスキル《ホリゾントル》を後ろに控えていたリトルネペントにぶち込み斬り飛ばす。

ソードスキルを発動した後に必ずやってくる一瞬の硬直の間に迫ってきたツルを、剣をねじ込ませることで防御して、そのまま前進。

一先ずこの囲いから抜けるのが先だ、多少の被弾は無視して、最短最速で抜ける。

頭上から前進を覆うように放たれた腐蝕の性質を持つ粘液を転がりながら避けて、殺すのではなく、その場から弾くために剣を振るう。

ズガツと硬質な音を響かせながら眼前のリトルネペントを除けて、更に押し進む。

不意に不快感が背中を突き抜けて、その衝撃ごと僕は一気に跳んだ。

腐蝕の液体が、足を絡め取る。

ジュワリと焼ける音を聞きながら、僕はやっとの思いで囲いを抜けた。

安物のポジションを口から流し込み、三割減ったHPを少しずつ回復させる。

さっきも言った通り、こいつら自体は大して強大ではない。

僕の場合は、HPに余裕があつて、囲まれていなければ、充分に対応出来る相手だ。

さて、仕返しの時間だ。
覚悟は良いな、雑草共が。

薄水色の軌跡が宙に残って、口の付いた植物の頭が空を舞う。
それを彩るように腐蝕液が降りかかり、躲せば地面の草が焼けていく。

どれだけの数を殺しただろうか。

既に両手足の指で数えることは出来ないくらいは斬ったであろう、
お陰で目の前のエネミーも流石にその数を減らしていた。

パツと見ただけで後十数匹と言ったところだろうか。

無闇に剣は振り回さない、無策でソードスキルは放たない。

最序盤である一層のここであれば、スキルを用いない普通の攻撃でもこいつらの体力は目に見えて削ることが出来る。

リトルネペントに限れば、攻撃力が高く防御力は反比例するように低いから、それは尚更だ。

一度ステータスをいじらせてくれれば、もう少し楽なんだがな、と小さく愚痴を零す。

実を言えば、既に僕のレベルは2になっていた。

しかし、攻撃力においてはレベル1のまま。

この世界ではレベルアップしたらポイントを貰い、それを筋力が、敏捷に振ることで攻撃力や、速さを上げるのだ。

だが今の僕にそんな余裕は無かった。

少なくともこの状況でシステムウィンドウは開けない、さつきは開いていたが、あんなもん自殺にも等しい行為だ。

二度同じ轍を踏む訳にはいかない。

何の因果か僕はやり直せた。

だから、死ぬ原因となったことは極力排除していくべきだ。

というか、今のままでも充分戦えているのだから、操作は終わった後でも問題は無い。

まあそれはそれとして早くいじりたいからさっさと死んでくれ。
そう願って僕は剣を閃かせた。

一度、二度、三度、四度。

ヒット・アンド・アウェイを何度も繰り返して減らしたHPを削り切る。

右に振り切った片手を引き戻しながら素早く回転、直近にいるリトルネペントに向けてホリゾンタルをぶち込みスカアアン！という爽快な音と共にもう一体も斬り飛ばす。

ほんの少しだけの硬直、片手剣スキルを取った時点で最初から使えるこのソードスキルは威力が低い分、当然硬直も短い。

一瞬にも満たない硬直の後に振り下ろされるツルを纏めて切り裂き後ろに下がる。

そうすれば最前にいる二、三体だけが先んじて追ってくる、飛ばされた腐蝕液を既のところ躲して転がり込むような勢いで剣を振り抜いた。

ガスツと食い込むような音が響き、同時に僕の腹を真緑のツルが捉えた。

強い衝撃に思わずカハツ息が漏れる、蹠踉めく僕を追い打つように腐蝕液が飛んできた。

なんとか全身に浴びることだけは避けたが、左腕が丸々吞まれてHPバーが少し、けれども目に見えて減る。

緊張感は無かった、またやり直せるという確証はどこにもなかったが、その上で現実味をしっかりと感じられなかった。

怖いくらいリアルなこの世界で、腕から流れ落ちる液体をそのままに、ポーションはまだストレージの奥に引っ込めて、僕は駆け出した。

一度剣を振るう度に、その全てを洗練させていく。

無駄を排除し、余分を消して、なるべく次に活かせるように動く。

斬り飛ばしては転がって、時折ツルに打たれ、腐蝕液をかぶり、それでも剣を振るう。

最後の一匹になったリトルネペントを斬り飛ばして、そしてやっと安堵して息を吐いた。

躲すのが下手くそなせいで、HPは既に半分を切っていた。

ポーションを流し込みながら、システムウインドウを開いてささっ

とステータスをいじる。

筋力に+2、敏捷に+1

特段深い考えはなく、取り敢えずバランス良く振ってからアイテム欄を見て、目当てのものがなかったことに嘆息する。

この狩場には、単純にレベリングの為にここに居たわけでは無いのだ。

『森の秘薬』という名称の付けられたクエストのクリアに必要なアイテムを、このリトルネペントが落とすからこそいたのである。

正確には頭に花のついた、ちよつとレアなりトルネペントから、ではあるが。

それを手に入れたいばかりに無駄に集めたのが死因であった辺り、酷く間抜けなものだ。

まあそれもなんとか切り抜けた、剣の耐久値も落ちているし、一旦村にでも戻るか、と思つた時だった。

遠くの方で、光が弾ける。

あれは何だろうか、と思つて駆け寄つてみればそこには二人の剣士がいた。

僕と同じ初期装備の片手剣を握り、しかし僕よりずっと華麗に、素早く倒していく。

プレイヤー、それも此処にいるということとは、間違いなくβテストター。

一目見ただけで分かる、圧倒的に僕より上手なプレイヤーだ。

ちよつと声でもかけるか、とそう思つたときだった。

茶髪の方の剣士が、垂直切りのソードスキル《バーチカル》を放つ。

その剣の行き先は勿論リトルネペントで、けれどもそのリトルネペントは少し他とは違う特徴を持っていた。

普通のリトルネペントにはない、真つ赤な宝石みたいな実を、頭にぶら下げている。

——え、駄目でしょそれは。

意図せず口からこぼれた言葉だった。

もうひとりの、黒髪の剣士も呆然としたようにそれを見ている。
瞬間、破裂音。

異常な臭気が辺りを覆い、茶髪の剣士は僕を驚いたような眼で見
て、泣きそうな顔で、申し訳なさそうにした後するりと消えた。

実を付けたリトルネペントの実は、破壊されればその匂いで辺りか
らリトルネペントを一斉に集める。

βテスト時代は、それによって平均レベル3〜4のパーティが全滅
したほどの数を、だ。

今、僕だけなら逃げられる。

そう思つて、けれども黒髪の剣士——少年を、僕は見てしまった。
目が、合つてしまった。

有り得ない行動を見た瞳、助けを乞うような眼差し。

半歩下がった足が止まる。

逃げようと込めた力が抜けていく。

心に靄が積もつて締め付けられる。

——ああ、畜生！

次は無いかもしれない、本当に死んでしまうかもしれない。

今度こそ始まりの街にある巨大な碑石に刻まれた僕の名前に、横線
が引かれるかもしれない。

——だけど！ 見捨てられる訳、無いだろう！

くそ、くそ、くそ！

僕は大馬鹿者だと、そう思いながら少年の元へと駆け抜けて、直近
のリトルネペントを斬り飛ばす。

動揺する少年に名前を聞いて、それから背中合わせに剣を構える。

キリトと名乗った少年に、僕も名前だけ伝えて、ただ一言。

生きるぞ、とそれだけ言つて僕等は弾けるように駆け出した。

ツルも腐蝕液も躲して茎を裂く。

スモールソードの耐久値を考えれば一撃一殺くらいじゃないと保
たないと判断しての行動だ。

溢れかえるくらい現れたリトルネペントだが、しかし僕等は思いの

外苦戦してなかった。

単純にキリトが僕の五倍くらい戦うのが上手いのもあったが、それより大きな理由があった。

というのも、半分くらい別の方角流れていつているのだ。

何故だろう、と思つたところで悲鳴が聞こえ、それでやっとピンと来る。

きつと、茶髪の剣士だ。

彼は多分、ハイドインク隠蔽のスキルによつて、リトルネペントからのターゲットから外れ、キリトが奮戦した後には美味い所だけ搔つ攫おうとしたのだろう。

けれどもそれは失敗に終わった、そもそも隠蔽のスキルは目の無いモンスターに効果は薄いのだ。

そして生憎、リトルネペントは目の無いモンスターだ。

それを馬鹿かと思うくらいの数を呼んでおいて、見逃されるなんてことないだろう。

PKなんざ企てるからだ、当然の報いだ。

そう、思う。

心の底からそう思うのに、それでも僕は、迷つてしまった。

頭のどつか隅つこの方で、微かな声がそれでもしつかりと叫ぶ。

きつと後悔するぞ、と反響するように何度も叫ぶ。

今お前が駆け寄れば、努力すれば、戦えば、もしかしたら助けられるかもしれないぞと叫ぶ。

傲慢だと思う、芯の通っていない信念だと思う。

こんなことをして、結局僕が死んで、やり直しも出来ない可能性だけだ。

だけども、だけれども。

この狂つた世界で、未だ混乱ばかりが残るこの世界で、理性も判断力も鈍ってしまったこの状況にひとりぼっちで置き去りにされてしまった同類を。

助けられるなら助けたい、そう思ってしまうことの、何がいけないだろうか？

引き絞って、撃ち放つ。

薄い水色の軌跡を創り出しながらその一撃は茶髪の彼に迫っていたリトルネペントを一瞬でポリゴン片に姿を変えさせた。

その勢いで、尻餅をついていた青年の腕を掴んで引つ張り上げる。ちやんと責任とって終わらせて、それからキリトに謝れ。

背中を叩いて、叫びながらももう一体、茎を斬り裂いてバックステップ。

腐蝕液が片足を焼いてHPが少し減る。

ドンと突き放せば彼は困惑したように両手の武具を見て、それからグツと握り直して走り出す。

キリトのカバーをするように、彼は剣を振り抜いた。

良かったと思うのと、衝撃が全身を貫くのは同時だった。

波のように押し寄せる大群は先程の比ではない。

腐蝕液は雨のように降りかかり、ツルは縦横無尽に襲い来る。

きつと彼らくらいの実力ならば何とか捌けるのかもしれない。

けれども僕の力は及ばなくて。

ツルは剣を弾き、腐蝕液は着実に僕の身体を捉えた。

ガクリとHPが減る。

既にオレンジ色にまで減少していたそれを横目に、僕は剣を振り抜き、次の瞬間それは弾かれた。

素早く放たれたツルが、横っ腹を弾いて飛ばす。

畜生、余裕こいて、かっこうつけて彼を行かせなければ良かったか。

歯を食いしばってソードスキルを放つ、真っ直ぐに閃いたそれは肉質の茎を斬り飛ばし、そして同時に僕の身体は腐蝕の液に包まれ呆気なくHPを空にした。

不安感を増大させるような真っ赤な世界が広がって、僕の視界が割れた鏡みたいに罅が入り、そして砕けた。

———— Loading

ジジジと何かを焦がすような電子音が鼓膜を揺らして、僕は意識を

取り戻す。

瞼を押し開ければ未だブレの残る世界が視界いっぱい広がって、少しの時間とともに輪郭をはつきりとさせていく。

真つ直ぐに突き出された剣が茶髪の剣士に迫るリトルネペントを一撃で両断した。

さっきの繰り返しみたいに彼に叫び、ケツを蹴る。

慌てるように駆け出した彼を追うように、僕もツルを弾くことを優先しながらバックステップで彼らの元まで全てを誘導した。

一人でやろうとするからいけないんだ、こいつらを三人に分散すれば良い。

他の二人の負担は重くなるが、それでも死ぬよりマシだ。

僕だって、この死に戻りが、何度続くか分からないのだから。

叫ぶ、叫ぶ、叫ぶ。

僕等は互いに背中合わせになるように戦っていたが、限界はひっそりと歩み寄ってきていた。

というか、僕に限って言ってしまうえば、限界はそう遠くない所にあったのだ。

現実の身体ではない、仮想空間の身体であるにも関わらず、足がもつれる。

やばいと思ったときには既に遅くて、ツルは腹を持ち上げるように弾き、腐蝕液が全身を覆う。

急激にHPは減っていく、けれどもポジションはもう底をつきていた。

僕等は背中合わせではあったが、互いの心配やフォローができるほどの余裕は無くて。

迫りくるツルを二度、三度と弾き、しかし四度目で腕ごと弾かれた僕は、更に降り掛かってきたツルを弾けずその身で受けた。

レッドゾーンにまで食い込んでいたHPバーが空になる。

誰かの悲鳴が聞こえた気がして、同時に僕の視界は真つ赤に染め上げられた。

ジジジと何かを焦がすような電子音が鼓膜を揺らして、僕は意識を取り戻す。

瞼を押し開ければ未だブレの残る世界が視界いっぱい広がって、少しの時間とともに輪郭をはつきりとさせていく。

またやり直せた、と思う前に自然と動いていた腕へ意識が向く。

明確に映るようになった世界で、僕はツルを弾いていた。

一度、二度、三度。

そして四度目を——受け流す。

左上から降ってきたそれはそのまま受け流し、落ちてきた三本のツルを躲すように飛び込みホリゾンタルを斬り放つ。

ギョツと隙間なく並んでいた三匹のリトルネペントの茎を綺麗に全て斬り裂いた。

立て続けに硝子が砕けるようなエフェクトを残しながら消えていき、右斜め後ろへと直ぐ様下がる。

瞬間、草地在焼けて、ツルが空を切る。

既にHPがレッドゾーンに食い込んでいる以上、ダメージはもう一度だって受ける訳にはいかない。

スモールソードを握り直して、冷静に前を見据える。

疲れは感じない筈のこの世界で、不必要に息を切らして、眼光は鋭く、全身に必要な分だけの力を込めて。

僕は地を蹴った。

そこからどれだけの間戦っただろうか。

視界に入っている中では最後の一匹に当たるリトルネペントの茎を、一撃で斬り飛ばす。

瞬間、ずつと振るい続けていたスモールソードは嫌な音を立てて罅が入り、そしてカシャンと呆気なく砕け散った。

……え？

このタイミングで普通壊れるか——!?

二人のフォローにも入らないといけないんですけど——!?
しくじった、もつと上手く戦えていれば、畜生。

くそが、と脂汗を流せば直後、気の抜けた声とともにドサリと勢いよく座り込む音が聞こえた。

は？

反射的に振り向けばそこにはエネミーの一つすら存在しなくて、茶髪の青年とキリトが背中合わせのように尻餅をついていた。

それを見て、何度か周りを見渡して、そうして僕はやつと戦いが終わったのだと、そう思った。

気が抜けてしまつてすると座り込む、そんな僕を見た彼らと目があつて、互いに苦笑したのだつた。

茶髪の剣士は『コペル』と名乗つた。

彼らはやはりというか、思った通りβテスターで、そしてコペルはキリトを殺すつもりであつたのは、間違い無かつた。

許されないことだと思つている、けれどもその上で謝らせて欲しいと、彼は地に頭をこすりつけて謝罪した。

——正直に言えば、彼の気持ちも分からない訳では無いのだ。

誰かを蹴落としてでも上に進むという、それ自体はこのゲームではある種正しい思考ではあるとも思うのだ。

それを行動に移すかどうかはまた、別問題ではあるが。

結論だけ言ってしまうが、結局キリトは彼を許した、それはもうさりと呆気なく。

突然横から入ってきた部外者の僕が目丸くしてしまふくらいにはあつさりだつた。

え？ そんなさくつと許しちゃうの？ 懐深すぎない？ と何故か僕の方が動揺していれば今度は僕が質問に答える側へと話は傾いていく。

まあそりやそうだ。

何度も言うようだが僕は彼らにとって突然割り込んできた他人である。

正確に言えば巻き込まれた、とも言うのだがそれはそれ。

適当に省略しながら説明すれば、焼き増しのようにコペルの土下座

が僕に向けられたりと、まあ何やかんやとあつたが特筆すべきは彼が謝り、僕も許したという点につきる。

そんなこんなで僕等は適度な距離を保ちながら村へと帰つたのだつた。

因みに花付きからのドロップアイテムは三人共入手することに成功していた、あれだけいたのだからまあ、当然とも言えるのだが。

既に時刻は深夜を過ぎていて、僕等は村に入ると同時に解散した。キリトは早速クエストをクリアしてくると言い、コペルは換金してくると、そして僕は真つ直ぐ宿屋に向かつたのである。

僕等は別にパーティを組んでいたわけではない、偶然にも出会つたから効率のために一緒に狩っていた、もしくは一緒に戦わざるを得ない状況に陥つただけの話だったから、別れるのも存外あつさりとしたものだった。

まあ僕としては結局生き残つた（死にはしたが）のだから文句はまるで無い。

レベルも3まで上がったのだし当面の目的も果たせし、結果オーライというやつだ。

僕よりβテスト時代にやりこんでいたキリトにお勧めされた宿の扉を開き、さつさと一部屋借りてベッドに沈み込んだ。

ヌルゲー：2

朝型人間と夜型人間というのがある。

違いを一言で述べるのであればそれは”早起きが得意であるかどうか”であろうか。

所謂朝型人間と呼ばれる人間は午前中から活発に、十全に活動することの出来る人間を指すものだし、またその逆で夜型人間というのは日が沈んでから活発に、能率良く動ける人間のことを指すからだ。

そして、それに当てはめて考えるのであれば、僕は圧倒的な夜型人間であった。

毎朝幾つもの大音量アラームを仕掛けてようやっと目を覚ませるかだろうか、という実にだらしなく映る夜型人間である。

近頃はその朝型夜型というのは遺伝子によって決められているもので努力でどうこうできるものではない、なんて話も小耳に挟んだが、だからといって世間様はそれを理由に「じゃあ起きられないのは仕方ないね、遅刻しようが何しようが全然オツケーだよ」なんて言ってくるほど甘くはない。

なので僕は毎朝毎朝力の入らない四肢に力を込め、ギリギリのラインで意識を保ちながら朝をやり過ごしていたわけだが、この日はちよつと訳が違った。

パツと目を覚ましたその瞬間から、意識が覚醒する。

二度寝しようと思う間もなく寝ることが日常ですらあったこの僕が、もう一度寝ようと欠片も思わないほどに、僕の意識はスツキリ爽快に目を覚ましていた。

おかしい、あまりにも変だと思って、身体を起こす。

ふわふわとした真っ白い毛布を除けて、ぼんやりと前を見た。

特に深い意味もなくそうすれば当然目に入ってくるのは十数年過ぎた僕の部屋——ではなく。

建てられてからそれなりの年月を経ているであろう、少し痛んだ木の部屋が、そこにあった。

そこまできて、ようやっと思い出す。

ああ、そりやそうか、と納得する。

ここは限りなく現実にくくて、それでも現実ではないのだ。

あくまでここは仮想世界だ、今、僕等にとつて現実であるこの世界は、それでもやはり本物ではないのだと、たったこれだけのことで僕はそう思ったのだった。

クエストは大した時間を必要とすること無く、恙無く終了した。

まあ持ってきたアイテムを渡すだけなのだから当然といえば当然なのではあるが。

何はともあれ、僕の背中には今、年季の入ってそうな赤い鞆にしまわれた簡素な黒い直剣がぶら下がっていた。

昨夜砕けたスモールソードとは段違いの性能、存在感である。

これならリトルネペントなんて最早敵ではない、レベルも3になったことだし尚更だ。

いや、まあこの先リトルネペントを狩ることはまず無いとは思うが。

兎にも角にも、僕は順調に進んでいるのであった。

この村唯一の食事処で全くもって味気のないパンに舌鼓を打ちながら次はどこに行こうか、とぼんやり考える。

ぶつちやけ一層についてとかもうあんまり覚えていないのだ。

なんてつたつて2ヶ月も前の話なのである。

β時代は、所謂廃人と呼ばれる人達ほどやり込んでいた訳ではないが、それでも僕だつてそこそこプレイしていた方で、なるべく上へ上へと次々進むタイプだった。

故に三日四日程度で後にした一層について、僕はあまり詳しくなかった。

アニールブレードを覚えていたのは長らくお世話になったからという理由で、それ以外については全くのノー情報である。

モッサモッサと美味しく無きようにパンを噛みちぎっていれば不意に、後ろから声がかかる。

中性的な顔立ちのした、恐らく僕よりは年下であろう黒髪の少年剣士。

もつと簡潔に言うのであればそれはキリトだった。

昨日の戦いでズタボロになっていた装備も綺麗に整っている。

そのまま流れるように対面に座った彼と僕は、何とはなしに下らない会話を始めた。

本当、この世界の飯は美味しくない、という話題から僕等は本気でこの先に関わらないようなどうでも良いような話をし始めたのであった。

——それはきつと、ある種の逃避だった。

現実を直視したくなくて、自分の命の重みをちやんと感じれなくて、未だどうすれば正解なのか分からなくて。

それから逃げるように、僕等は目先のものや一ミリも本質に関わってこないようなテキトーな雑談に興じていた。

それももう、終わりではあるが。

何時まで経ってもこうしてはいられない、何故かと言われれば答えに悩むところだったが、それでも僕は何とか前に進まなければと思っていた。

そんな僕に、キリトが問うてくる。

次の行き先は決まっているのか？ と。

勿論決まっていない、決まっている訳が無いだろう。

ドヤ顔でそう言えばあからさまに呆れられたのは言うまでもなかった。

こうして僕等はそのまま解散——とはならず、一時的なパーティを組んでいた。

まあ僕としては一人味方がいるだけで心強いし、それは同時にキリトもそうだったのだろう。

どうせなら一緒に行動しても損はないだろう、そんな理由で僕等はパーティ、というよりはかかコンビを組んだのであった。

本当はコペルもいれば良かったが、まあ現実はそうもいかない。

許されたとはいえコペルがそれで負い目も罪悪感も忘れられるのかと言えばそんなことはまずありえないからだ。

許した側も許した側で、完璧に心を許せるなんて、出来ようはずもなく。

一応誘いはしたが遠慮のメッセージが来た時点で僕等もしつこく誘うことはなかった。

適当にポーシヨンの類を買い込み、キリトの助言を受けながら装備を揃える。

結果的に似たり寄ったりな装備になった僕等は互いに苦笑して、やつと村を出たのだった。

それからというもの、僕等は暫くの間コンビを組んでいたと思う。あの日村を出てから既に一月近くが経過していた。

今の最前線は——変わることも無く、第一層。

βテスト時代に比べるとあまりにも遅いペースで、しかしその間に出了た死者は優に1000を超えていた。

1000である、この世界に来た人数の、十分の一。ただかだか4週間程度で、これだけの人数が帰らぬ人となっていて、その数はドンドンと増えていた。

それも、仕方のないことだと思う。

この世界にはそれこそ老若男女、様々な人間が来ていて、その中には当然ネットゲに慣れていない人や深く考えることのなかった人、あまりの混乱におかしくなってしまった人だっていた。

そしてそれらが纏めて、消しゴムで消すみたいにしてこの世界、延いては現実からも退場していったのだった。

情報屋に聞けばその数は直に2000を超えと言っていた。

その数は何だか大きすぎて、実感は伴われることは無かったが、やはりこの世界において死は絶対的なもので生き返るだなんてことはありえないのが普通であるという確認ができた。

そして、キリトという有識者と出会えたことは非常にラッキーであるということにも気付く。

何故かと言えばキリトはとんでもない人物だったからだ。

いや、この言い方では誤解を招きかねないな。

キリトはとんでもない知識と実力を兼ね備えた人物だった。

彼は十代前半みたいな顔をしておいて、所謂ネトゲ廃人というやつだったのだ。

一層のことですら、事細かく覚えていたのである。

βテスト時とは少し違うところがあれど、大体同じであるという彼についていけば危険な目に遭うということがまず無かったし、誰よりも早く動いていることが幸いして経験値の美味しい狩場を次々と一人占めならず二人占めできた。

何だか少しズルしているような気分もしたが、そんなことより強くなる事のほうが優先順位の高かった僕等は積極的に経験値を貪った。

お陰で僕等のレベルは他の進んでいるプレイヤーと比べて少しは上であろうという自覚があつたし、余裕もあつた。

具体的に言うのであれば他のプレイヤーがレベリングをしている間に攻略に全く関係ないクエストばかり受注し始めたのである。

特段経験値が良い訳でもなく、単なる報酬目当てだった。

勿論、その内容も大したものではない。

いや、付け加えさせて貰うのであれば、それは当然僕等にとっては大したものではあつたし、何なら何日も潰すくらいには夢中にさせられるものだった。

こと攻略や戦闘等には一切掠りすらしないほど関係がなかったというだけで。

その内容は雑多だった、一言で纏めるのであれば嗜好品、または娯楽である。

詳しく言ってしまうえば、パンに塗るクリームだったり、ちゃんとした味の飲み物であったり、全くステータスに効果のないサンングラスだったり、伊達メガネだったり、アクセサリーだったり。

そういつたこのゲームの所謂遊び要素の部分を僕等は空気も読まず楽しんでいたのである。

かといって攻略に全く関わっていないのかと言われればそんなことはなく。

僕等は適度に迷宮区を探索し、程々に遊んでいた。

まあ、最近は遊びの比率が高いような気もするが、それはそれ。今日も今日とて探索していた迷宮区から引き上げようと、完全無味のパンにクリームを塗りたくったのを頬張りながら歩いていたときだった。

暗く淀んでいる迷宮に、流星がたなびく。

それは確かに星でも何でも無くても、嫌な言い方をすればただのソードスキルのライトエフェクトだった。

細剣カテゴリの初期スキル《リニア》による薄緑色の鋭く、速く、美しい一撃。

流星を幻視するほど流麗だったそれを放つのは、僕より少し背の低い少年、または少女だった。

何故判別つかないのかと言えば、その人物は深くフードを被っていたからである。

ステップや戦闘の運び方は何だか僕にも似たような雰囲気を感じるが、こと攻撃に置いてはキリトすら上回るのではないかと思うくらい卓越した剣士。

凄いがいたもんだな、なんて思ってキリトに話しかければ返事が返って来ない。

え？ 無視されるとちよつと傷ついちゃうよ？ と横を向けば彼はそこにはいなかった。

……神隠し？

何それ怖いんですけど……と思えば彼はいつの間にか細剣使いに話しかけていた。

前から思っていたのだが、彼、自分をコミュ障だと言う割にはコミュニケーション能力が高すぎる。

対人能力に関しては並程度だと自負している僕が何だかコミュ障なのではないかと錯覚してしまうほどだ。

いや「今のはオーバーキルだよ」とかドヤ顔で指摘するところからスタートなのは何だかオタクっぽい気はするが……

それでも物怖じしない、という辺りで彼はやはり頭一つ抜けているように思えた。

声音的に細剣使いは女性だということがわかったが、しかし僕は二人の会話に入る隙を見出だせず後ろの方でぼけらあつと眺めていれば細剣使いが激怒したようにキリトを睨めつける。

さてはキリト、地雷を踏み抜いたな、とこの一ヶ月で大体彼の性格を理解していた僕はやれやれと彼女を宥めようと間に入るべく歩を進めたその次の瞬間だった。

彼女はまるでシャツトダウンでもされたかのように、突然その場に倒れ伏した。

困ったように振り向いたキリトと、不意に目が合う。

……いやまあ、捨て置くことはできない、よね。

フラフラフラフラと、僕等は二人がかりであるにもかかわらず、やつとの思いで一人の、それこそ歳下にすら感じられる少女を迷宮区から運びきった。

これが、現実の世界であれば僕一人でも余裕……とは言わないが、それでもここまで疲弊することも、時間をかけることもなかったであろう。

この世界には、重量制限というものがある。

一人あたりどれだけの重さを運べるか、レベルで決まっているのだ。

僕等のレベルがもつと、それこそ何倍も上だったら人一人くらい訳ないが、今はその限りではなかった。

ぶつちやければ二人で担ぐことすら不可能である。

ここに放置する訳にもいかなないが、相手は女性、不用意に触るというのもあまり好ましくない。

揃って頭をひねった結果、僕等は考えることを放棄し彼女を寝袋にぶち込んだ。

後はもう、二人で無理やり引きずればオールオッケーである。

敵が出たらその都度どちらかが守り、どちらかが戦うという方針を取り庇いあった結果、普通に出る時に比べ数倍も時間をかけ、迷宮区を出たのであった。

直ぐそこに聳え立つ木の根元に、寝袋から放り出した彼女を寝か

せ、後はただ待つ。

今更になって運んでいる所誰にも見られなくて良かったな……とキリトと無駄話をする数時間。

太陽が顔を出してきて、そろそろ昼飯にしようと、とあるクエストの報酬であるサンドイッチを頬張る。

無駄に時間がかかるだけあってしっかりと美味しいそれをむしゃむしゃと平らげていけば不意に、声がした。

お、やつと目を覚ましたな、食う？　なんて言っただけでサンドイッチを手渡せば未だ思考がボヤケているのか無言で受け取り彼女はモサモサと食べた。

目を丸くして驚いている辺り、なぜだか僕が嬉しい。

ふふん、と気を良くすれば彼女はようやく意識をはつきりとさせたようで、若干顔を赤くしながら余計なことを……！　とキレだした。ええ……情緒不安定過ぎない？

余計なお世話とか言わないでくれよう何て思えばキリトが任せろと言わんばかりに「助けたのは、あんたのためじゃない」とか言い出した。

なんか急に格好つけ始めたなこいつ……と思ったがその一言で彼女は納得したように迷宮区のマップ情報を投げ渡した。

そのままじゃあなと去ろうとする彼女にキリトはやはり声をかけた。

折角なら攻略会議にでも出ないか？　と。

攻略会議——もつと詳細に言うのであれば、第一層ボス攻略会議。

この一ヶ月で力を溜めてきた、いふなればトッププレイヤーとでも言うべきプレイヤーたちの一部が開くとあちこちの村や街で宣伝し、そして今日この日に行われる予定のもの。

ツールバーナという迷宮区に最も近い街で開かれるそれに、僕等は三人揃って参加していた。

周りを見渡せば、ぎつと四十人程度はいるだろうか。

それが多いのか少ないのかは判別しなかったが、考えてもみれば

命がかかっているのである。

であればやはり多いのだろう。

既に8000人前後しか残っていないプレイヤーの中でも活動的なのはほんの一握りなはずで、その更に一部だけだと考えれば、一つの教室に収まりそうなこの人数もやはり多いと思えた。

徐々に喧騒が増していく、開催の時間はもうすぐだった。

まだかまだかと期待と不安が織り交ぜられたような心境でいれば、不意に一人の青年が、集められた広場の中心に降り立った。

この世界では珍しい、青色の髪が目立つ。

堂々と、余裕を見せながら話し始めたその青年は、言わば好青年というやつで、付け加えるのであればイケメンだった。

世間一般で言うフツメンというやつである僕とは比べ物にならない。

綺羅びやかな鎧や剣が良く似合う、嫌悪感を与えない爽やかな印象で、並べる言葉は理路整然としていて、わかりやすい。

まあ要約すればみんなで頑張ってボス倒していこうぜ！ ではあののだが。

まあそんな感じで結構順調に進むもんだな、と思っていたら関西風な口調の静止の音が、群衆の中から飛び込んだ。

そうしてドカドカと偉そうに広場に出てきたのは、髪の毛をトゲトゲ——例えるのであれば、モヤットボールのようにした青年だった。

何故だか青筋を立てていたキバオウと名乗った彼は真ん中までやってきた後に、叫ぶように己の怒りを吐露した。

βテストの奴らが、初心者置いていったからこんなにくさんの人が死んだのだと。

この中にもいるであろう、お前らのせいでこんなにも攻略が遅れているのだと。

βテストは全員アイテムと装備放り出して土下座しろと、彼は言ったのだ。

何て理不尽なことを言うのだろうか、と思うと同時に、あながち間

違ってもいない、とも思った。

少なくとも僕があの日一人で抜け出さずに、あの街で助け合いでもしていればもしかしたら一人か二人くらいは、死なずに済んだかもしれないことは確かであったからだ。

まあ、それでも僕に助けられたのはきつとその程度であっただろうし、そもそも最大でも1000人しかいないβテストが9000人全員を助けられたかと言われればそれは有り得ないことだ。

彼の怒りは分かる、けれども放つ言葉はあまりにも感情的すぎた。彼の語ることは、あまりにも理想論に過ぎないからだ。

誰だって全員助かって、全員幸せになれば良いって思う、だけどそれは飽くまで理想に過ぎない。

全員を死なせないなんて、土台無理な話なのだ。

手の届く範囲の人間を助けるだけでもやつのことで、いっぱいいっぱいなことを僕はこの世界に来てひしひしと実感していた。

僕よりずっと歳上だろうに、それを知らないのか、はたまたこの状況を”誰かのせいにしたいのか”は分からないが、このままずっとあの演説が続くのもちよつとな、と立ち上がれば視線がグンツと僕へと向いた。

四十の視線は、中々重い。

文句でもあるのかと吠え立てる彼にちよつと落ち着けよ、と手を上げろ。

キリトが申し訳なさそうに僕を見る。

まあ任せておけよ、と僕は中央へと降りていった。

かねてから言うように、僕はβテストだ。

といつても、正直に言えば僕の戦闘スキルとでも言うべきものは、初心者の人達と大して変わらない。

そもそもキリトくらいやり込んでいる人でなければ、身体に染み付くなんてことは無いからだ。

そして彼くらいやり込んでいたのも、一部の人に過ぎない。

何故かって言えばそりゃあ、このβテストというのはランダムな抽選で当たるものだからだ。

当たった誰もがゲーマーという訳じゃないのだ。

その中には僕等みたいな学生や、時間のあまり取れない社会人、ゲームにほとんど触ったことのない人だっていたし、何ならまだ小学生程度の子供だって居た。

その上で全員が全員攻略しようとした訳ではないし、大半は戦う、というよりはこの幻想的な世界を体験してみた、といった程度に過ぎない。

だから一部を除けば、βテスターと初心者、あまり大差がなかった。

むしろ攻略していたβテスターは死んでも生き返る、という経験を少なからずしているはずで、どこか危機感を覚えずに戦い死んだ人がいてもおかしくない。

というか、キリトとかそんな感じで見ていて少し危ういところがある。

そういったこともあり、βテスターだって皆が皆強いって訳じゃないんだよ、というのとそもそもあの状況じゃ自分を第一に考えてしまうのは仕方のないことだったと僕は思う、と懇懇と説いてみる。

確かに協力し合えばベストだったけど、そう上手くはいかないもんだ。

けどまあ、気持ちはわかる。

だから、烏滸がましいようだが、βテスター代表として僕が謝ろう。

誠心誠意謝ろう、だから、どうか和解してやってくれないか、と僕は頭を下げた。

集まったプレイヤーはしんとしながら僕等を見つめ、キバオウは動揺したように声を漏らす。

暫くそうしていれば、彼は観念したように、少しだけ申し訳なさそうに頭を上げてくれと言った。

自分も少し熱くなりすぎた、すまない、と手を差し伸べる。

内心心臓をバクバクと言わせていた僕は、そのことに大いに安堵しながら、その手を取った。

そんなこんなでこの話は思いの外丸く収まり、攻略内容へと話はシ

フトチェンジしていた。

とある情報屋より提供されたボス情報を元に、明日ボス攻略を行うと彼らは言い、それに伴い六人パーティを作つてねと言われた僕等は酷く動揺した。

何せ周りがドンドンと作つていく中僕等だけあぶれているのである。

パツと見た感じ僕等以外は六人なようで、あぶれたのは完全に僕等だけのようだ。

さらつとコペルとかいたりしないかな、と見てみたが彼の姿は無かった。

少し残念だと思うが、まあ彼も元気にやっていることだろう。

取り敢えず細剣使いとキリトと組んでおく。

自分のHPバーの下にkirittoとasunaという名前とHPが並んで表示された。

なにげに細剣使いの名前今初めて知つたな、と思いながら肩身狭そうに好青年——ディアベルの元へと向かう。

たつた三人ぼっちの僕等を見て、ディアベルは苦笑したがそれでもちゃんとボス専用パーティ……レイドパーティというやつへは入れてくれた。

いや入れてくれなかつたら抗議していたのだが。

与えられた役目はボスの取り巻きのモブ……を相手にするパーティが取りこぼしたモブの相手である。

人数が少ないのだから仕方ないことではあるが、少しばかり不満を覚えたのは言うまでもなく、アスナに限っては直ぐにでも掴みかかりそうな勢いだった。

パーティリーダーのキリトがそんなアスナを必死に宥めながら承諾し、会議は終了したのだった。

その日の夜、僕等はキリトの泊まっている部屋へと集合していた。

何故かって言えば、原因はアスナである。

解散時に今日も風呂借りていい？　なんてことをキリトと話していたら掴みかかってきて入らせろと言ってきたのだ。

まあ、彼女にはスイッチやPOTローテといったパーティ戦闘では重要なアクションになることを知らなかったし、説明するにはちょうどいいと彼は了承した。

キリトがマジで知らないのか、と若干冷や汗をかいていたのは記憶に新しいが。

まあそんなこんなで僕等は彼の部屋で、彼の講義を受けていたのであった。

途中、アスナが風呂に入っている間に懇意にしている情報屋が来て一騒ぎあったらしいがそれはそれ。

入れ替わるようにやってきた僕にはあまり関係のないことである。

つついゲーム用語を使ってしまう彼の翻訳をしながら、僕等の夜は更けていったのであった。

ヌルゲー：3

第一層ボス攻略戦。

正午を少し過ぎた頃、戦いの幕は切って落とされた。

レイドのリーダーであるディアベルに続くように、四十人少しの戦士たちがわつと溢れるようにボス部屋へとなだれ込む。

迎え撃つように取り巻きのモブたちが光とともに現れて、ボスであるコボルド達の王——イルファング・ザ・コボルドロードが咆哮を上げた。

戦闘自体は、驚くくらい順調に進んだ。

というのも、今回のレイドの平均レベルがβテスト時代のそれを大きく上回っていたからだ。

何せ僕等には一ヶ月という長い準備期間を経てここにいる。

だから僕等は恐らく、本来想定されているレベルを大きく上回っていた。

それに加えて、ディアベルの指揮力の高さだ。

彼は良く戦場を見ていて、少しでも崩れそうなところがあれば確かな指示でそれを未然に防いでいた。

お陰で僕とキリト、アスナの暇さと言ったらこの上ないくらいである。

マジで全然モブが来ないし、来ても正直一瞬で片が付いてしまう。

こういつては何だが、多分僕を抜かした二人の戦闘技術というのはこのレイドの中でも群を抜いていて、正直二人が最前線に加わればもっとスムーズになるだろうことは確かなくらいである。

だがまあ、この状況は僕にとってはある意味都合が良かった。

クリアは勿論大切だが、それ以上に僕は二人にだけは死んでほしくなかったし、もつと言えばこのレイドに入っている人全員に死なないで欲しいと、そう思っていたからだ。

ふわあと小さくあくびを一つ、それを咎めもしないアスナが不満げにボスを見ていた。

ボスとの戦闘は、既に佳境へと到達しようとしていた。

βテスト時代と同じであれば、あのボスはHPが三割を切れれば武器を曲刀へと変えるはず。

武器が変われば当然ソードスキルも変わるので、変化する行動に気をつける。ディアベルが散々注意していたのを思い出す。

少しだけ緊張で背筋が伸びたが、それも杞憂であると切り捨てた。

何せ最前線はディアベルがいるパーティが主体だ。

そんな彼が傍に居るのなら大丈夫だろう、と僕は彼に対してそれなりに大きい信頼を置いていた。

この短い間に積み上げた実績は、しかしそれでも常人には出来ないことであることは確かであったからだ。

ボスが武器を変えるタイミングで、ディアベルが全員を少しだけ下からせる。

ここまでのほんとはんと三人揃って僕等はその姿を見ていたわけだが、僕はここで少しだけ違和感を覚えた。

冷静に対処しようとするディアベルではなく、その相手であるコボルド王に。

僕だってβテスト時代はそこそこやっていた方で、その上当時は弱かろうが足を引っ張ろうが取り敢えずボスに挑んでみようぜ、という風潮があったこともあり、ボス戦には毎回参加していた口だ。

当時速攻で何度も僕等をぶった切ったその武器とは、何かが違う気がする。

変だな、と思ってよく見ようとした瞬間、キリトが叫んだ。

駄目だ、下がれ、退け、逃げろと叫び、直後、コボルド王のソードスキルは放たれる。

地を揺るがしながらその巨体を持って跳躍、筋肉質な身体をグツと捻りながら降り立つと同時に撃ち放つ。

血の色みたいに真っ赤なライトエフェクトだった。

三百六十度、全方位に放たれたその一撃は、ボスを囲むようにしていた最前線パーティのその全員を容易く斬り飛ばした。

激しい衝撃音、ディアベルを含める六人のプレイヤー全員のHPバーが、一瞬で半分を切った。

倒れ伏した六人のプレイヤーは、スタンを受けて動けない。

——見たことのあるソードスキルだった。

当時十層まで進んだところで、やっとお目にかかったスキルで、結局数度見ただけでテスト期間は終わってしまったが、それでも僕はあれに見覚えがある。

刀スキルだ。

それ以上分かることは無かったが、それでもここに来て初めての”未知”によってレイドに参加していたプレイヤー達は動きを止めてしまった。

その中で僕は、半ば無意識的に走り出していた。

頭の中ではずっと誰かの声が、反響している。

走れ、走れ、走れ、走れ！

救え、救え、救え、救え！

お前がやらなければ、誰かが死ぬぞ！

鳴り止むどころか怒声にすら聞こえるそれが何時までも頭の中で跳ね回って、埋め尽くす。

それに押されるように僕は地を踏み込む。

何をしているんだらうと思う、この世界に来る前の僕なら阿呆を見る目で見ただらう。

だけど、止められない。

くそつたれがと汚い言葉を漏らす。

自分の預かり知らぬ意志に突き動かされているようで、それでもこれは僕の意志なのだとも思う。

もしかしなくても、僕の死の危険はあった。

繰り返せる保証は無く、ただ僕は、手の届く範囲だと思ってしまった。

思って、しまったのだ。

コボルド王の正面で、何とか立ち上がったディアベルまで、後数メートル。

ギリギリと刀身を赤く染めるコボルド王が一步踏み込んで、同時に僕はソードスキルを撃ち放った。

間違はなく、この世界に来てから最速の一撃だった。

選んだのは単発垂直斬り《バーチカル》。

薄水色の光を放つ片手剣は、地面スレスレを斬り上げるように放たれたコボルド王の刀の先と、掠めるようにぶつかり合う。

軽いライトエフェクトが散って、刀は僕の左腕を斬り飛ばし、すぐ横のディアベルの身体を持ち上げた。

酷い不快感が身体を襲って足をもつれさせる。

グラリと体勢の崩した僕の目に映ったのは、真っ赤に染まった刀の連撃を受け止め吹き飛ぶディアベルの姿だった。

爆発したかのような音と共に彼は吹き飛んで、キリトに受け止められる。

一言、二言言葉を交わした彼は、その身体を硝子の破片のような欠片に、姿を変えた。

グラリと視界が揺れる。

しくじった、そう思う前に、頭の中で誰かが囁いた。

——ああ、駄目駄目。もう一度。

知らないはずなのに、どこか聞き覚えのあるような声が響いて。

瞬間、僕の意識は異常な苦痛を伴って、ドロリと溶けた。

—— Loading

ジジジと何か焦がすような電子音が鼓膜を揺らして、僕は意識を取り戻す。

瞼を押し開ければ未だブレの残る世界が視界いっぱい広がって、少しの時間とともに輪郭をはつきりとさせていく。

不可思議な痛みが身体を今も襲っているような気がして、それでも僕は駆け出した。

バカみたいに息を切らせながら、次は間に合わせる、その一心だけで地を踏みしめる。

使うソードスキルを切り替える。

片手剣突進系スキル《レイジスパイク》。

先程より速く到達し、今度はしっかりと刀身と刀身がかち合い火花を起す。

一瞬の鏢迫り合い、その結果は、無様にも僕の負けだった。
渾身の一撃は弾かれ、僕の手からアニールブレードが離れてクルクル宙を舞う。

止まることのない赤い一撃が、僕とディアベルを纏めて跳ね上げた。

赤い連撃が、僕等を襲う。

——もう一度。

割れた視界の中で、総てが溶ける。

——Loading

ジジジと何か焦がすような電子音が鼓膜を揺らして、僕は意識を取り戻す。

瞼を押し開ければ未だブレの残る世界が視界いっぱい広がって、少しの時間とともに輪郭をはつきりとさせていく。

なんでか分からないが、あの声を聞いた瞬間繰り返し返せるという確信があった。

だから、迷うこと無く走り出す。

己の浅い呼吸が耳を打つ。

走れ、走れ、走れ走れ走れ走れ！

間に合わせる、絶対に助かる、助けてみせる。

レイジスパイクじゃ力が足りない、バーチカルだと速さが足りない。
い。

どうする、どうするのが正しい？

悩める時間は後数秒、決めろ、なにか別の、もっと良い手が有るはずだ。

既にコボルド王はモーションに入っている、半ばやけくそで僕は単発ソードスキル《スラント》を撃ち放った。

斜めから放たれたその一撃は、同じくバーチカルと同じように掠め合い、やはり僕の腕ごと彼はかちあげられた。

——ただだ、もう一度。

焼かれるように、意識は溶ける。

——Loading

ジジジと何か焦がすような電子音が鼓膜を揺らして、僕は意識を取り戻す。

瞼を押し開ければ未だブレの残る世界が視界いっぱい広がって、少しの時間とともに輪郭をはつきりとさせていく。

打開策を見出すために、必死になって記憶を掘り返す。

何か無いかと漁っていけば、何時だったか小耳に挟んだことを思い出す。

スキルに上手く速さを乗せれば、その分威力に倍率が掛かる、という話だ。

藁にもすがるような思いだった僕がそれに頼るのは必然で、レイジスパイクの構えを取りながら僕は全意識を剣に向けた。

ただモーシヨンに入れるのではない、スピードを限界まで上げて、それをそのまま剣に乗せる。

鋭く一步踏み込む、全身を捻りながら放たれた僕の一撃は、赤い刀身と交わって、数瞬の拮抗。

けれども押し込むどころか止めることすら出来なくて。

さっきの繰り返しみたいに跳ね上げられた。

死の連撃が、動けない僕へと振り抜かれる。

——もう一度だ。

砕け散った視界が、痛みと共に真黒に染まる。

—— Loading

ジジジと何か焦がすような電子音が鼓膜を揺らして、僕は意識を取り戻す。

瞼を押し開ければ未だブレの残る世界が視界いっぱい広がって、少しの時間とともに輪郭をはつきりとさせていく。

もう一回だ。

ブーストはもう少し掛けた、もつと踏ん張れた。

気合を入れろ、気を抜くな、手を抜くな。

全部賭けろ、全部載せろ、全部込めろ。

何もかもを尽くさないと、助けられない。

流れるはずのない汗が額を伝っているような気がした。

疲れも痛みも感じない筈の身体が、酸素を求めている。それでも無理やり地面を踏み抜いて、剣を薄く光らせる。振り抜く、叩き止める。

光が空に軌跡を残し、ぶつかり合った剣がミシリと悲鳴を上げて弾き上げられて。

そうして僕等は跳ね上げられて。

刀身が、身体を抉り飛ばす。

——まだまだ、もう一度。

視界がグズグズに崩れ溶ける。

—— Loading

ジジジと何か焦がすような電子音が鼓膜を揺らして、僕は意識を取り戻す。

瞼を押し開ければ未だブレの残る世界が視界いっぱい広がって、少しの時間とともに輪郭をはっきりとさせていく。

確かに最高の一撃だった。

今の僕に出せる限界でも、レイジスパイクでは足りない。

くそが。

一言そう漏らして地を踏みしめる。

この世界では全くもって意味のない荒い呼吸をしたままディアベルを横に押した。

そうすれば彼の身体はグラついて、同時に僕の身体も大きく弾かれた。た。

——いや、こいつ重すぎ……！

良く考えてみればディアベルは金属鎧を纏っている訳で、その逆で僕は革製の軽い装備だ。

その上僕はどちらかと言えば敏捷寄りのステータスで、彼の身体を大きく弾くことは不可能だった。

抵抗も出来ずに、僕だけ跳ね上げられる。

その事実にも、口端が上がって。

僕の身体は吹き飛んだ。

急速にHPバーは空になって、ひどい顔をしたキリトを瞳に映した

まま、僕は砕け散った。

——良いね、その調子。さて、もう一度だ。

グチャリと、意識が潰れて消える。

——Loading

ジジジと何か焦がすような電子音が鼓膜を揺らして、僕は意識を取り戻す。

瞼を押し開ければ未だブレの残る世界が視界いっぱい広がって、少しの時間とともに輪郭をはっきりとさせていく。

思わず呼気が漏れる。

今にも狂いそうな感情を無理やり押さえつけて頭を回す。

あれを止めるにはレイジスパイク以外のソードスキルじゃないと駄目だ。

けれども他では間に合わない。

それならもうダメだ、止めるのは諦める。

ディアベルを躲させればそれで良い。

直接押すのは駄目だ、僕に防ぐことも不可能。

なら、斬り落とす。

単発水平斬り《ホリゾンタル》。

跳ねるように飛び込みディアベルの腰へと剣を振り込ませる。

ちょうど鎧の隙間を狙ったそれはしかし、その身体に触れた瞬間ディアベルは軽いノックバックと共に少しだけ弾かれ、僕の身体は硬直した。

赤い刀が、僕を斬り上げる。

抵抗も碌に出来ないまま、僕の身体はぶち抜かれた。

——ほら、頑張つて。もう一度。

視界は砕け、ドロドロと溶け落ちていく。

——Loading

ジジジと何か焦がすような電子音が鼓膜を揺らして、僕は意識を取り戻す。

瞼を押し開ければ未だブレの残る世界が視界いっぱい広がって、少しの時間とともに輪郭をはっきりとさせていく。

駆け抜けながらシステムウインドウを数回叩く。

同時に消えていくレイドのHPバーが消えていき、そして僕はホリゾンタルを放った。

鎧の隙間を縫うように抜かれた剣は彼の腰へと入り込み、彼の半身をぶった切った。

彼のHPバーは一気に空っぽになり、同時に僕の身体はカチ上げられた。

ああ、計算ミスしてしまったな、斬りすぎた。

そう思うと同時に、僕の頭上にある緑色のカーソルが下からスルスルと、オレンジ色に染まっていく。

そうか、他プレイヤーを傷つければ犯罪者扱いで、カーソルの色が変わるんだっけ。

まあでも、そんなことはどうでも良い。

次は救う。

ぼんやりとした思考の中、そう思いながら、連続する酷い衝撃が僕を襲った。

——良い覚悟だ、さあ、もう一度。

僕は、溶け落ちていく。

—— Loading

ジジジと何か焦がすような電子音が鼓膜を揺らして、僕は意識を取り戻す。

瞼を押し開ければ未だブレの残る世界が視界いっぱい広がって、少しの時間とともに輪郭をはつきりとさせていく。

切り捨てた体積が大きすぎた、あれだと彼のHPは持たない。もつと少ない体積で、且つ彼を射線から逸らす。

酷く呼吸がし辛い、身体が、足がガクガクと震えている。

けれどもそれを意に介さず、僕は即座にレイドから抜けて、姿勢を低く保ちながら駆け抜ける。

起動したソードスキルは《ホリゾンタル》。

左下から右上へと斬り放つ。

ディアベルの足首から膝まで抜けるように斬り裂いて、断面に沿っ

て彼の身体がずり落ちた。

瞬間、刀が迫る。

硬直さえ無ければ間に合った、そう思った次の瞬間僕は打ち上げられて。

誰かの悲鳴を聞きながら身体を硝子へ変えた。

——後ちよつとだ。もう一度。

意識を保てず、ドロリと溶けきった。

——Loading

ジジジと何か焦がすような電子音が鼓膜を揺らして、僕は意識を取り戻す。

瞼を押し開ければ未だブレの残る世界が視界いっぱい広がって、少しの時間とともに輪郭をはつきりとさせていく。

レイドを抜けて駆け抜ける。

僕には一つだけ勝算があった。

キリトから、僕はこんな話を聞いたことがある。

ソードスキルを発動するためには、飽くまでモーションに入れば良いのだと。

つまり理論上ソードスキルからソードスキルへ、繋げることは可能なのだ。

姿勢を低くしながら滑り込むように跳び込んで、無理やり姿勢を変え。

ギリギリ入るかどうかといった姿勢でホリゾンタルを起動して、同じように足首から膝の辺りまで斬り抜いて、そのまま力強く地面を蹴る。

ずり落ちていくディアベルの身体を押しつけながら僕は宙に浮いて、右上に振り抜かれた剣を握る右腕の手首の角度を少しだけ変える。

こうするだけで、無理はあるがバーチカルの体勢だ。

ソードスキルが終わり、光が消えつつある剣に、もう一度光が灯る。

跳ね上がるように飛び込んできた剣を、宙に浮いた僕に届かせるには少しだけ遅い。

体重の総てすら乗せた、僕にとつての全力が真つ赤に染まった刀とぶつかり合つて、剣が軋み合う。

仮初の身体が全力で悲鳴を上げて、それでも全霊の力を込める。ステータスで決められた力以上は出ないのは分かつてはいたが、それでもそういうものだ。僕は、切り捨てることは出来なかつたからだ。

ライトエフェクトが火花みたいに飛び散つて、閃光みたいな光が煌めいて視界を埋める。

ガリガリと剣が削れていく音が響く、スキル同士がぶつかり合つて激しい不快感が身を襲う。

だが、まだ保つ。

このまま、押し切る。

そうしてもう一度力を込めようとして、次の瞬間横合いから衝撃が僕を襲つて弾き飛ばされた。

剣が手から離れて、赤く光る刀が勢いよく空を切る。

アスナ———？

そう、僕に突つ込んできたのはアスナだった。

僕等は軽く馬乗りのような形になって、アスナが僕に酷く激昂する。

死にたいのかと泣きそうな顔しながら叫ぶのだ。

けれどもそんなことより、と見てみればディアベルはキリトが回収していた。

流石キリト、ナイスフォロー。

はは、と軽く笑えば、何が面白いのよ！ と怒鳴られる。

そう怒らなくても良いだろう、何故なら僕も彼も、生きているんだから。

そう言つて、彼女をどかして走り出す。

彼女の抗議の声を聞き流して、僕はキリトからディアベルを受け取り素早く下がる。

大丈夫か、意識はしっかりしてるか、そう問えば大丈夫、本当にごめん、と彼は言う。

僕は何に對して謝られているのかが分からなくて、適当に良いよと応えて彼のパーティーメンバーへと投げ渡し、キリトの加勢へと駆け出した。

彼の剣と、コボルド王の刀が交差する。

互いに美しい光を輝かせながら、強烈な炸裂音と共に弾きあつた。同時に、加速。

互いが互いのスキルを途中で停止させたせいで起こるスタンの間に、僕は飛び上がって剣を振るつた。

僕一人程度の攻撃では大したダメージにはならないが、それでも無いよりマシだ。

少しの切り傷を付けて、キリトの横に並ぶ。

彼は僕を、非難するような、けれどもその中に憧憬のようなものを宿しながら僕を見る。

本当、お前馬鹿だよ。けど、そういう所、かつこいいと思う。

キリトはいやに真面目腐つてそう言つて、すぐに恥ずかしくなつたのか大声で行くぞと叫んだ。

少しだけ呆気にとられた僕は、言葉にならない声を漏らして、それから彼に叫び返す。

そんな僕等の横にアスナが来て、置いて行かないでよ、パーティーでしよ、と呟く。

その姿に軽く笑う、この短期間で、よくもまあここまで仲良くなれたものだ。

じゃあ三人でいこうか、と僕等は駆け出した。

キリトの指示の下、弾き、躲し、流し、走り、斬る。

明暗様々な光があちこちに色を残して着実に削つていけば、不意に多数の音が響いた。

レイドパーティーがディアベルの指揮の元、動き出す。

キリトに並んだディアベルが言う。

指揮を頼む、と。

この場で刀スキルを知っているのが、キリトだけだったのか、はまたそうでないのかは分からないが、少なくともディアベルは知らなく

てキリトは知っていた。

今はそれだけが明確で、彼は全員の生存率を上げるためにリーダーという格をさらりとキリトに渡したのであった。

キリトがうなずき声を張り上げる。

己が最前線に立ちながら、彼は見事にそれをやってのけた。

的確な指示で、回避させ、弾かせ、チャンスを作り上げる。

一パーティ全員のソードスキルが閃きコボルド王はついにその身体を倒した。

同時に、トン、と彼は地を蹴った。

ふわりと浮いて、V字に剣を振り抜き、コボルド王を叩き切る。

合わせるようにアスナの細剣が閃いて。

コボルド王は激しく爆散した。

第一層ボス攻略戦：死亡者0

その事実を純粹に嬉しく思う。

正直重いハンデを背負ってしまったと己のカーソルを見ながら思うが、人の命と比べればこんなもの、屁でもなかった。

壁に背を付け座り込み、深く長い息を吐く。

シンプルに疲れたな、とそう思う。

相も変わらず肉体的疲労は無いはずだが、何だか四肢が酷く重い気すらした。

そんな僕を、人影が覆う。

顔を上げればそこにいたのはキリトとアスナだった。

お互い生き残れた何よりだな、なんて言えば無茶をするのはやめてくれと言われる。

いや、これは控えめに僕が捉えただけで、本当はもっと長文だったし感情に塗れていたのだが。

何はともあれ僕はお灸を据えられていた。

いやごめんて……とペコペコしていたら更に声をかけられる。

誰かは分からない、分からないけれどもそのプレイヤーは明らかに怒りを込めながら僕に詰め寄ってきた。

ディアベルのパーティの一人なのだろうか、彼は、僕を掴んで悲鳴

のように叫んだ。

殺す気だったのか、と。

あんなことをせずとも助けようと思えば助けられただろう、それなのに何故斬ったのかと。

理不尽な話だ。

こうしなければ助けられなかったからこうした。

だけどそれが分かるのはきつと僕だけだ。

他から見ればこの最善は最悪に見えるのは、仕方がないことだ。

僕のレベルがあと一つでも上だったらもつと幅は広がって、こうはならなかったとも思う。

そう、思いはするががやはりこれが僕に出来た最大の最善だった。

僕のステータス的に、ああするしか無かったと言ってはみるが、信じる人はいない——いや、少ないだろう。

多分キリト辺りなら分かってくれるんじゃないだろうか。

彼は僕の限界を知っているし。

ディアベルが僕を擁護しようと声を上げるが、既に空気は悪いものに染まっていて意味を為さない。

敢えて言うのであれば断罪のような雰囲気になっていて、正直に言えば酷く居心地は悪かった。

僕は正直言えば自己満足にも近い感情で彼を助けたのであって、その事実があれば他からこの行動がどう映ろうが構わなかったが、流石にこれは厳しい。

少しだけ、心が震える。

仕方のないことだ、と自分に言い聞かせて、少しだけ息を吐いて立ち上がる。

僕等は所詮昨日であったばかりの、知り合いにすら満たない関係で、こんなことをしてしまえば不信感を募らせてしまうのは、どうしようも無いことだ。

だからといって、その言葉を認めるわけにもいかなかったが、しかし否定しても通りはしない。

僕は再三、悪意だけはなかったとそれだけ主張して、ボス部屋の奥、

コボルド王が守っていた小さな扉を開け放つ。

この先が二層へつながる階段で、螺旋状に渦巻くそれを足早に駆け上がる。

そうして辿り着いた二層への扉を、グツと開く。

瞬間視界に広がったのは信じられないくらい絶景で、思わず目を奪われそつと手すりに寄りかかり、脱力して座り込む。

何だか僕はセンチメンタルになってしまって、ままならないものだな、と薄く呟いた。